

「捨てた一粒の柿の種」

校長 駒田 勝

人生には、将来を大きく左右する「岐路（分かれ道）」というものが、何度か訪れます。その一つが高校3年生の「進路決定」の時とも言えます。目標に向け努力した日々が最も大切で、それは人生を変えるものです。

さて、皆さんは 寺田 寅彦 という人の名前を聞いたことがあるでしょうか。彼について少しだけ紹介しておきます。寅彦は、明治から昭和初期にかけて活躍した東京帝国大学の物理学者です。「金平糖の角の研究」や「ガラスの割れ目の研究」などはよく知られ、身近な物理現象を対象とした研究は、「寺田物理学」とも呼ばれています。また、高校時代には、当時英語の教員として勤務していた夏目漱石に出会い、漱石を介して正岡子規や高浜虚子などの文人とも交流を持ち、影響を受けたと言われています。そんな彼は、自然科学以外の分野にも造詣が深く、多くの随筆を残しています。彼の「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉は、皆さんも聞いたことがあるのではないですか？ 余談ですが、漱石の著書「吾輩は猫である」の水島寒月は寅彦がモデルだと言われています。

少し前置きが長くなりましたが、ここからが本題です。

「捨てた一粒の柿の種 生えるも生えぬも 甘いも渋いも 畑の土のよしあし」

という寅彦の言葉があります。彼自身は「捨てた種」と表現していますが、意識して様々な種を蒔いていたようです。実際、寅彦から得た「学術の種」を大切に育てた多くの人々が、各界で活躍をしました。

実は、皆さんの周りにも、様々な種が蒔かれているはずですが、先生方が意識して蒔いた種もあれば、友達が無意識に蒔いた種、地域に蒔かれた種など、様々あるはずですが、意識して周囲を見渡し、「興味ある種」は拾い上げてみましょう。その種を発芽させ、大きく育てるためには、それに合った肥沃な土壌（進路先）が必要となります。「興味ある種」を手にした皆さんの進むべき場所がどこにあるのか。今、何をすべきなのか等々、必要な情報を自ら探してみましょう。進路指導室や図書室には、探している情報がきっとあるはずですが、大いに活用しましょう。とりわけ、進路指導部の先生方は「進路指導のプロ」です。足しげく出向き、まずは顔を覚えてもらいましょう。また、分からないことは分かるまで尋ねてみましょう。貴重な情報が得られ、やるべきことが見えてくるはずですが、目標があつてこそ、努力できるというものです。

手にした種を育てる土壌（進路先）は、人によって異なるはずですが、自分にぴったり合った土壌に出会ってこそ、将来「実のなる大樹」に育つというものです。また、「夢は、叶えるためにある」とも言います。皆さんの努力には、大いに期待したいと思います。

最後になりましたが、この「進路の手引き」は、本校の先生方による手作りの資料で、皆さんの先を歩む先輩たちの貴重な情報がまとめられています。大いに活用してもらいたいものです。特に、先輩からのメッセージ「合格体験記」は生きた情報であり、他では得がたい資料です。この先、進むべき道が見通せず、心細く不安になったときには、この冊子を手にとってみましょう。きっと、心強い味方になってくれるはずですが、